



毎週日曜、遠く福島市から南相馬市へと、足繁く通う大学生がいる。福島大学の学生団体「うんとイトコ南相馬!」のメンバーだ。昨年、授業で南相馬市を訪れたことがきっかけで、学生をはじめとした多くの人たちに町のことを知ってもらいたいと活動している。どのような活動をしているのか、代表の湯村真帆さんにお話を伺った。

きっかけは「むらの大学」

福島大学では、地域の課題を見つけ解決していく「ふくしま未来学」という授業が行われている。その中で昨年、南相馬市内で二週間のフィールドワークを行う「むらの大学」を開催し、地域の課題を探った。その中で出た主な課題が、地元農業のイメージに関する問題だ。原発事故の影響で、農作物の悪いイメージが市内外で付いていると感じた一方で、実際に訪れ口にした野菜は検査を通った安全なもので、それを周囲に知ってほしいと感じるようになった。

この「むらの大学」に参加した学生が中心となって立ち上げたのが、「うんとイトコ南相馬!」だ。自身らが小高で野菜を育て、その活動を様々な形で発信することで、南相馬市の農産物について伝えていきたいと考えている。

分担し継続して取り組み

「うんとイトコ南相馬!」は、「農業プロジェクト」と「広報プロジェクト」の二つのチームに分かれて活動している。「農業プロジェクト」は、メンバーが交代

で週に一回小高に通い、地元農家の指導を受けながら野菜の有機栽培を行っている。実際に自分たちで農業を行うことで、発信する「情報」を作り出す。一方「広報プロジェクト」は、南相馬の農作物を様々な形で発信する。SNSはもちろんのこと、農作物の「販売」も発信手段の一つとしている。福島大学に隣接するコミュニティカフェで月に一度販売会を行い、採れたものを肌で感じてもらう取り組みだ。多忙な学生生活の傍ら、十人ほどのメンバーが役割を担い、遠い場所でも継続して活動を続けている。

「おいしい!」を広げる

これからも「うんとイトコ南相馬!」は、活動の幅を広げていく。今後は状況を見て、採れた野菜を小高の仮設商店や大学祭などで販売し、幅広い人たちに地元農作物を知ってもらう計画だ。また、コミュニティカフェでも野菜を使った料理を提供していきたいと考えている。

メンバーを支えるのは、協力する様々な地元の人たちだ。それに応えるためにも、若い力でできることをやり、自分たちの好きになった土地を多くの人に知ってもらいたいと話す。そして周囲の学生を巻き込みながら、もつと多くの地元の人たちと交流していきたいと考えている。私たちの気づかないところで奮闘を続ける若い力が、これから作っていく地域の未来に期待したい。

「うんとイトコ南相馬!」
 Facebook <https://www.facebook.com/untotooko/>
 Twitter/Instagram @unto_etoko